

司会：（西川長夫）

予想をはるかに越える多数の方々に参加いただいて、主催者としてはうれしいことなのですが、事務局が少し混乱し開会の時間がおくれてしまいました。申し訳ありません。今日のプログラムには「多文化主義・多言語主義の現在」というテーマが出ていて、それから問題提起とコメントというふうになっています。構成というか、時間的配分としては最初に陳先生のご講演をお願いします。英語でお話しいただきますので通訳とあわせて約一時間で、これが第一部。その後五分ほど休憩して、次に問題提起者の酒井、スリチャイ、三浦、渡辺の各氏にお話し願って、その後十五分ほど休みをとり、それから最後にコメントとフロアのみなさんからの質問・討論の場を設けたいと思います。かなり長い時間でたいへんなのですが、よろしくお願いします。

今日の陳先生の講演と、その後のシンポジウムは、われわれの研究所で今までにおこなわれたさまざまな研究会やシンポジウムと関連する一連のものとして設定しました。今までに「国民国家と多文化社会」をテーマとした連続講座でヨーロッパ統合の問題をやり、台湾シンポジウムを聞きました。それからカナダ、南アフリカ、そしてオーストラリアにかんする連続講座が最近終わったところです。昨日は、リービ英雄、酒井直樹両先生をお招きして講演会をひらきました。酒井先生には続けて今日のシンポジウムにも参加していただきます。その他、去年の十二月には「民族問題を考える」と、「外国における日本研究－アメリカを中心に－」という二つのシンポジウムを、日米共同研究会その他の研究会との共催で、連続して開いています。そういった研究会やシンポジウムで一連の問題をとりあげてきたのですが、そのなかの多文化主義・多言語主義に焦点をあてて、今日はできればこの三年ほど積上げてきたもののひとつの結論といえますか、そういうものの総括的なまとめになれば、と主催の側では位置づけております。

それでは早速、陳先生にお話しを願おうと思います。陳先生は余りお馴染みでない方もおられるかも知れません。『思想』の一月号、「カルチュラル・スタディーズ」特集号に「帝国の眼差し－「準」帝国とネーションステイトの文化的想像」というタイトルで、たいへん興味深い長い論文を書かれています。今日のお話しのタイトルは“The New Taiwanese”ということで、たぶんこの前の論文とつながっているのだろうと思うのですが、英語でお話ししていただくことになっております。それでは陳先生、お願いいたします。